

## 実体経済の動向

### ◇製品在庫の増勢続くも後ろ向きとみられるものは一部にとどまる

(生産——増勢やや鈍化)

鉱工業生産(季節調整済み)は、12月に久方ぶりで減少(−1.5%)したあと、1月+0.2%、2月(速報)+0.7%とこのところ伸び悩んでいる。しかし、こうした生産の動きについては、9～11月著増の反動や暖冬による冬物製品生産の早期手じまいなど、一時的とみられる要因も多く、必ずしもメーカーの生産態度に基調的な変化が生じたとは即断しがたい。

最近の動きをやや詳しくみると、一般資本財は、12月著増の化学機械がその反動もあって著減し、また、運搬機械、繊維機械も減少したため、金属加工機械、ボイラー原動機等の増加にもかかわらず1月にわずかながら減少(−0.4%)し、2月も前月比+0.6%と伸び悩んだ。資本財輸送機械は1月には鉄道車両の著減から−4.9%と減少したが、2月はトラック、大型乗用車が増加を続け

たためかなりの増加を示した。建設資材は、窯業・土石製品(みがき板ガラス、耐火レンガ等)の減少から1月−0.5%と小幅減少を示したあと、2月は金属製建具(アルミサッシ、アルミドア、スチールサッシ)の増産を主因に前月比+3.4%と再び大幅に増加した。耐久消費財は1月+0.3%と伸び悩みのあと、2月はエアコンディショナー、冷蔵庫、扇風機等夏物電機の増加、腕時計、金属洋食器等の増加から前月比+1.8%と増加した。非耐久消費財は1月微増(+0.4%)のあと、2月は灯油、メリヤス製品、たばこ等の減少から前月比−1.9%と伸び悩んだ。生産財は1月に+2.5%とかなり増加したが、これは、大型高炉の稼働を背景に鉄鋼がかなり増加したほか、化学、石油、非鉄、繊維等も軒並み増勢を示したためである。なお、2月には化学、銅、石油製品(ガソリン、軽油)等の減少からさすがに−0.9%と減少した。

(出荷——1月増加のあと減少)

鉱工業出荷(季節調整済み)は、12月−1.8%と減少のあと、1月は+2.5%とかなり増加したが、2月(速報)には−1.1%と再び減少するなどかなりフレの大きい動きを示している。財別には、1月は生産財、一般資本財をはじめ各財とも増加したが、2月には資本財輸送機械、消費財等が減少したため前月比減少を示すこととなった。なお、例月フレの大きい船舶、鉄道車両を除いてみると、1月+2.6%、2月−0.3%と2月の減少幅はかなり縮小することとなる。

最近の動きをやや詳しくみると、一般資本財は、土木建設鉱山機械、金属加工機械(圧延機)、特殊産業用機械(合成樹脂加工機)等を中心に1月+2.2%と増加したあと、2月も掘さく機械、圧縮機・送風機、工作機械、機械プレス等の増加から+0.2%と小幅ながら増加した。資本財輸送機械は、トラックは減少したものの、船舶の著増から1月には+1.9%と増加したが、2月には、船舶、鉄道車両の著減、一部トラック、乗用車の減少から相当大幅な減少となった。一方建設資材は、1月に製材の出荷増を映じて+1.1%と増加し

### 鉱工業生産の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	43 年				43 年	44 年	
	1～ 3月	4～ 6月	7～ 9月	10～ 12月	12月	1月	2月
鉱 指 数	148.1	156.1	162.4	169.9	169.7	169.9	—
工 前期(月)比	1.9	5.4	4.0	4.7	−1.5	0.2	0.7
業 前年同期(月)比	17.2	18.4	17.5	17.6	16.3	15.8	16.6
投 資 財	3.0	5.6	4.4	7.3	−0.6	−2.0	2.3
資 本 財	0.8	6.5	6.0	7.7	−0.8	−2.6	2.1
同 (輸送機械を除く)	4.7	9.6	1.4	9.5	0.6	−0.4	0.6
輸 送 機 械	−5.0	1.0	15.0	3.9	−3.1	−4.9	—
建 設 資 材	8.3	3.1	0.6	6.8	0	−0.5	3.4
消 費 財	−1.4	9.0	1.7	3.7	−3.5	−0.8	1.3
耐 久 消 費 財	4.4	10.8	5.1	6.3	−3.1	0.3	1.8
非 耐 久 消 費 財	−3.1	5.4	−0.1	2.0	−2.4	0.4	−1.9
生 産 財	3.8	2.4	5.3	3.6	0	2.5	−0.9

(注) 1. 通産省調べ、44年2月は速報。

2. 前年同期(月)比は原指数による。

たあと、2月も金属製建具(アルミサッシ、スチールサッシ、スチールドア等)の増加を主因に+2.7%とかなり増加した。耐久消費財は1月+1.2%と精密機械(時計)、楽器等を中心に増加したあと、2月はやぐら式電気こたつ、カラーテレビ、掃除機、ガスこんろ等の減少が響いて、前月比-3.4%と大幅に減少した。また、非耐久消費財も医薬品、繊維製品、灯油等を中心に1月+2.2%と増加したあと、2月にはこれらのうち繊維製品、灯油等が減少したため-0.6%と小幅の減少を示した。同様に生産財出荷も、1月に鉄鋼、非鉄、石油、化学等を中心に+2.0%と大幅に増加したあと、2月には石油、繊維、鉄鋼等の減少が響いて-0.9%と減少した。

#### 鉱工業出荷の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

		43 年				43 年	44 年	
		1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月
鉱工業	指数	146.6	154.1	157.3	162.7	162.7	166.8	—
	前期(月)比	4.1	5.1	2.1	3.4	-1.8	2.5	-1.1
	前年同期(月)比	16.6	17.9	14.8	15.9	15.0	13.7	14.7
投資財	資本財	9.4	5.5	1.3	4.9	-4.0	2.0	-2.1
	同(輸送機械を除く)	9.3	6.5	1.9	4.5	-5.0	2.6	-3.3
	輸送機械	4.6	9.6	-0.4	9.5	-2.3	2.2	0.2
	建設資材	19.2	0.6	6.0	3.3	-9.0	1.9	—
	消費財	8.6	3.8	-0.8	5.8	-1.7	1.1	2.7
	耐久消費財	0.9	7.8	-0.2	2.9	-0.7	3.3	-1.8
	非耐久消費財	1.8	12.2	7.3	2.7	5.7	1.2	-3.4
	生産財	-0.7	5.3	-2.6	3.3	-2.1	2.2	-0.6
		3.0	2.9	4.4	2.6	-0.8	2.0	-0.9

(注) 1. 通産省調べ、44年2月は速報。  
2. 前年同期(月)比は原指数による。

#### (製品在庫——増勢続く)

鉱工業製品在庫(季節調整済み)は、10~12月前期比+8.9%と大幅に増加したあと、1月前月比+0.2%、2月同+2.4%と引き続きかなりの増加を示した。製品在庫は、ならしてみるとこのところ月率+2%をこえるかなり顕著な増勢を示しているが、このうちには前向きの在庫増しとみられるものも少なくなく、在庫過剰感が強まっている

とみられるのは、いまのところトラック、乗用車の一部および暖冬による売れ残りの生じた一部の冬物製品以外にはあまりない。たとえば、生産財は1、2月と連続してかなり増加しているが、その中心となっている鉄鋼、化学等は最近の商況などからみても、当面過剰在庫が問題となるほどの状況にはないとみられ、また建設資材、耐久消費財の在庫増には、金属製建具、夏物家電製品のように前向きとみられるものも少なくない。

最近の動きを特殊分類別にみると、一般資本財は、繊維機械、風水力機械(ポンプ、圧縮機・送風機)、農業用機械(トラクター)等を中心に1月+2.3%と増加のあと、2月もポンプ、トラクター、鉄鋼用ロール等の増加から+0.7%と増加した。資本財輸送機械は、トラック、乗用車を中心に1、2月とも大幅な増加を続け、建設資材は金属製建具を中心に1月やや減少のあと、2月は再び大幅に増加した。一方、耐久消費財は、1月に精密機械、石油ストーブ等を中心に減少したが、2月は、夏物家庭電機、小型乗用車等を中心に増加し、非耐久消費財は1、2月ともに、減少を示した。また生産財は化学、鉄鋼、非鉄等を中心に

#### 鉱工業製品在庫の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減率・%)

		43 年				43 年	44 年	
		3月	6月	9月	12月	12月	1月	2月
鉱工業	指数	132.4	135.9	143.2	156.0	156.0	156.3	—
	前期(月)末比	6.6	2.6	5.4	8.9	2.3	0.2	2.4
	前年同期(月)末比	21.9	22.1	23.6	25.4	25.4	24.3	26.3
製品在庫率	指数	90.3	88.3	89.8	95.9	95.9	93.7	97.0
	投資財	7.8	-2.3	11.9	11.4	2.4	0.2	2.6
	資本財	12.2	-6.0	13.8	11.4	1.5	2.4	1.6
	同(輸送機械を除く)	4.4	2.4	6.4	13.6	6.3	2.3	0.7
	輸送機械	47.9	-33.7	42.3	10.9	-10.9	3.2	—
	建設資材	4.5	2.1	9.6	11.6	3.7	-2.1	3.2
	消費財	5.8	6.4	6.5	12.1	2.7	-3.1	0.9
	耐久消費財	14.5	10.5	8.4	16.3	0.2	-4.3	1.5
	非耐久消費財	0.4	5.1	3.9	6.7	3.4	-2.0	-2.8
	生産財	5.7	1.4	1.5	4.5	2.6	3.5	3.1

(注) 1. 通産省調べ、44年2月は速報。  
2. 前年同期(月)末比は原指数による。

1、2月とも相当大幅な増加となったが、これまでの増勢が比較的ゆるやかなものであっただけに、いまのところ各品種とも格別在庫過剰感が生じていないようである。

以上のような出荷、在庫の動きを映じて、在庫率指数は1月に93.7と12月(95.9)に比べ低下したものの、2月(速報)には97.0と41年3月以来の最高を記録した。

1月のメーカー原材料在庫(季節調整済み)は、前月比+1.8%と6ヵ月連続の増加となった。業種別にみると、新設高炉の操業本格化を控えてい

#### 製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	43 年			43 年		44年
	6月	9月	12月	11月	12月	1月
在庫指数	130.1	131.3	140.1	136.6	140.1	142.6
前期(月)末比	-2.5	0.9	6.7	2.2	2.6	1.8
国産分	-4.0	-2.0	6.3	2.0	1.9	1.4
素原材料	-7.9	-1.7	11.0	3.9	3.0	2.8
製品原材料	-2.5	-2.0	4.4	1.7	1.5	0.7
輸入分	2.0	10.2	8.2	2.2	5.1	3.5
素原材料	2.4	10.8	7.7	1.6	5.3	3.7
在庫率指数	86.4	83.5	87.2	85.8	87.2	85.9
国産分	84.0	78.6	82.2	81.4	82.2	80.7
素原材料	96.2	91.3	99.1	97.2	99.1	98.0
製品原材料	82.5	77.0	79.2	78.6	79.2	77.4
輸入分	95.8	103.2	103.4	101.2	103.4	103.9
素原材料	96.5	105.0	105.3	102.6	105.3	106.1

(注) 通産省調べ、44年1月は暫定。

#### 製造工業原材料消費の推移

(季節調整済み、前期(月)比増減率・%)

	43 年			43 年		44年
	4~6月	7~9月	10~12月	11月	12月	1月
製造工業	1.3	4.0	2.7	-0.3	1.0	3.2
国産分	1.7	4.1	2.4	-0.6	0.8	3.2
素原材料	2.6	3.7	3.2	-1.7	0.9	4.0
製品原材料	1.6	4.2	2.4	-0.4	0.8	3.1
輸入分	-2.6	2.8	4.7	2.9	2.8	3.0
素原材料	-1.9	3.1	3.9	2.6	2.6	2.9
製品原材料	-9.3	-1.4	14.6	2.9	3.5	3.5

(注) 通産省調べ、44年1月は暫定。

る鉄鋼業の在庫が引き続きかなりの増加を示したほか、石油精製、ゴム、窯業、機械等の業種でもかなりの増加をみた。また、特殊分類別にみると、輸入素原材料が引き続き大幅な増加となったほか、国産分も素原材料を中心に引き続き増加した。一方、原材料消費(季節調整済み)は、12月に+1.0%と増加のあと、1月は鉄鋼、非鉄、機械、金属製品等の業種を中心に+3.2%と大幅に増加した。このため、1月の原材料在庫率指数は85.9、前月比-1.5%と5ヵ月ぶりで低下した。

12月の販売業者在庫(季節調整済み)は、前月大幅増加(+3.4%)のあと、+0.4%と微増した。これを品目別にみると、民生用電機、自動車、鋼材、コークス、生ゴム等が増加した反面、非鉄、石油、繊維品は減少を示した。

#### 販売業者在庫の推移

(季節調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	43 年			43 年		
	6月	9月	12月	10月	11月	12月
総合指数	126.0	142.4	147.9	142.6	147.4	147.9
前期(月)末比	-3.6	13.0	3.9	0.2	3.4	0.4
素原材料	0.9	30.2	1.1	-4.9	5.0	1.2
製品	-3.9	11.5	4.5	0.9	2.9	0.7

(注) 通産省調べ、43年12月は暫定。

#### (設備投資——機械受注の増勢鈍化)

設備投資動向に関連の深い一般資本財出荷(季節調整済み)の動きをみると、12月-2.3%、1月+2.2%、2月+0.2%とこのところやや伸び悩みの感もないではないが、本行短期経済観測の結果などをみても1~3月にかけて設備投資は相当の増加を示すものと予想されており、これらを総合すると、設備投資は年明け後も根強い増勢を示している模様である。

次に先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、1月前月比+0.9%のあと2月も+0.6%と引き続き小幅の増加にとどまった。この結果、1~2月をならしてみても10~12月の水準(前月比+3.0%)をやや下回っており(-3.6%)、機械受注の増勢はこのところかなり鈍化し

## 需要先別機械受注の推移

(季節調整済み、月平均、単位・億円)

	43 年			43年			44 年		
	4～ 6月	7～ 9月	10～ 12月	12月	1月	2月	12月	1月	2月
民 需	1,528	1,668	1,710	1,576	1,593	1,826	( 17.1)	( 9.2)	( 2.5)
同 (海運を 除く)	1,369	1,533	1,580	1,505	1,518	1,528	(- 14.4)	( 1.1)	( 14.7)
製 造 業	761	872	860	772	897	861	( 14.7)	( 11.9)	( 3.0)
非 製 造 業	756	807	860	819	699	987	(- 9.8)	( 0.9)	( 0.6)
同 (海運を 除く)	593	669	739	752	605	666	( 8.5)	( 14.5)	(- 1.3)
							(- 12.3)	( 16.3)	(- 4.1)
							( 25.3)	( 6.7)	( 6.6)
							( 15.8)	(- 14.7)	( 41.2)
							( 20.0)	( 13.0)	( 10.5)
							(- 6.9)	(- 19.6)	( 10.1)

(注) 経済企画庁調べ、カッコ内は前期(月)比増減率(%)。

ている。2月の動きを受注先業種別にみると、製造業では化学、繊維、食料品業界からの受注はやや増加したが、石油、窯業、造船からの受注が大幅に減少し、また紙・パルプ、機械、鉄鋼等からの受注も減少したため、前月比 -4.1%の減少となった。一方、非製造業からの受注は、電力からの受注が前月減少の反動もあって著増したのを主因に +10.1%と増加した。

### ◇商品市況は、品目により区々ながら鉄鋼の反発目だつ

最近の商品市況では、これまで着きぎみに推移してきた鉄鋼が反発に転じたのが目だった。そのほかの品目は区々な動きを示し、人絹糸、そ毛糸が小じっかりとなったほか、化学製品の一部も値上がりした反面、綿糸、スフ糸、上質紙等は軟調を続けた。

鉄鋼がここきて反発に転じたのは、①欧州向けをはじめ、低関税国、共産圏向け輸出の好調から、対米輸出自主規制による輸出の先細り不安が当面薄れてきたこと、②新規設備の稼働に伴う今後の供給能力増加見込みについても、従来予想されていたほど大きなものではないことが徐々に明らかとなり、これまでばく然といただかれていた先行き供給過剰感に反省気運が生じてきたことによるものとみられる。その他品目については、需給地合いに格別変化のきざしはなく、値上がりのない

し下げ止まりを示した品目についても、メーカー側の市況対策の強化(人絹糸、そ毛糸、灯油の減産、銅の市中浮動玉買上げ)や季節的事情(そ毛糸)などの要因によるところが大きい。ただ、繊維については、全体としてなお軟弱さを改めていないものの、これまで根強くいただかれていた暖冬異変に伴う信用不安感がここきてやや薄れ、市場人氣にひところほどの暗さはみられなくなっている。

品目別の動きをみると、まず鉄鋼では前記のように先行きの需給見通しの変化から先安感が後退しつつあり、鋼板類、条鋼類とも強含みないし、小幅値上りを示し、引き続き上伸基調を示している。繊維では、人絹糸、そ毛糸は小じっかりながら、綿糸、スフ糸は続落、また生糸は値下がりのおと小反発を示した。機屋、ニッターの手当て買い態度は依然慎重で、商いは活発さを欠いている。このため、メーカー(綿紡)側に、当面の市況好転を望み薄とみて安値にかまわず4月決算期前になんとか市販を進捗させたいという姿勢が出てきている。ただ、秋冬物決済について当初懸念されたほど信用不安が広がらなかった事情もあり、市場人氣にはひところほどの暗さはうかがわれなくなっている。非鉄では、銅の荷動きは主力電線、伸銅メーカーの買い一服から盛り上りを欠いているが、産銅各社による市中浮動玉の買上げが引き続き行なわれているほか、先行き春闘ストによる減産が予想されることもあって、市況は下げ止まりぎみとなっている。鉛は、メーカーの建値引上げ(3月積み+4%)が浸透し強含みとなり、また亜鉛も強保合いを続けている。石油は、全般に弱基調ながら、灯油が寒気到来から出荷の回復をみたほか、精製業者の生産調整(灯油の得率引下げ)も響いて月央には下げ一服となった。揮発油、C重油は依然弱含みに推移した。建材では、セメントの出荷が関東地区を中心に伸び悩んだため市況は弱含みとなったが、メーカーの強腰は依然変わっていない。木材は実需不振から騰勢一服商状となった。化学製品のうち、基礎薬品では硫酸が需給引き締まりを映じメーカーの値上げ

が浸透したが、合成樹脂では、ポリエチレンが値上がりした反面、塩ビは値下がりした。紙では、従来の需給地合い変わらず、上質紙が弱含みの反面、白板紙、段ボール原紙は値上がりした。砂糖は、外糖高をながめたメーカー、商社の売り控えが目だち続騰した。

(2月の卸売物価——久方ぶりに上昇)

2月の卸売物価は、総平均で前月比+0.1%と3か月ぶりに上昇した。これは銅系非鉄、木材・同製品(外材、国内製材)、窯業製品(陶製品)等が続騰したうえ、鉄鋼も反発したためであるが、一方繊維品(原糸、織物)、石油・石炭・同製品(灯油、重油)等は続落した。産業別分類でみると、工業製品が中小企業性製品(製材、窯業製品)の値上がりから前月比+0.1%上昇し、非工業製品も鉱業生産物(銅鉱、碎石)を中心に前月比+0.1%上昇した。

3月にはいつてからも、上旬中は前旬比で+0.2%、中旬も同+0.1%と騰勢を続けた。これは織

維品、石油・石炭・同製品が続落し、また非鉄も中旬にはいり反落したものの、鉄鋼、食料品、化学品等が続騰したためである。産業別分類でみると、工業製品は、上旬に前旬比+0.1%上昇のあと、中旬は保合いとなったが、非工業製品は上、中旬とも前旬比+0.3%の上昇となった。

(2月の工業製品生産者物価——保合い)

2月の工業製品生産者物価は、前月比保合いとなった。品目別では、食料品、繊維二次製品、非鉄、木材・同製品等が上昇した反面、合織、織物、普通鋼鋼材等は下落した。

(3月の消費者物価(東京)——かなりの上昇)

3月の消費者物価(東京)は、前月比+1.0%の大幅上昇となった。これは、豪雪の影響もあってくたもの、野菜等季節商品が大幅に値上がりしたことが主因で、季節商品を除いた平均では、前月比+0.1%の微騰にとどまっている。品目別にみると、食料費が上記のような事情から前月比+2.4%と大きく上昇したほか、被服費、雑費等も上昇

卸 売 物 価 指 数 の 推 移

(単位・%)

	ウ エ イ ト	下 降 期 (ピーク 43/2) 43/2 →43/7	上 昇 期 (ボトム 43/7) 43/7 →44/2	最 近 の 推 移										
				43 年			44 年			44 年 2 月			3 月	
				12 月	1 月	2 月	上 旬	中 旬	下 旬	上 旬	中 旬			
総 平 均	100.0	- 0.9	+ 1.1	保 合	保 合	+ 0.1	保 合	- 0.1	+ 0.2	+ 0.1	+0.1			
食 料 品	15.7	+ 1.8	+ 2.2	- 0.2	- 0.5	保 合	保 合	- 0.2	+ 0.6	+ 0.4	+0.3			
織 維 品	10.7	- 1.7	- 2.2	- 0.4	- 0.1	- 0.7	- 0.3	- 0.4	保 合	+ 0.1	-0.3			
鉄 鋼	9.7	- 1.7	+ 0.5	- 0.7	- 0.5	+ 0.1	+ 0.1	保 合	+ 0.1	保 合	+0.4			
非 鉄 金 属	4.4	- 9.5	+ 7.6	+ 3.0	+ 1.3	+ 1.4	+ 0.3	保 合	+ 0.1	+ 0.1	-0.1			
金 属 製 品	3.8	- 0.6	+ 1.7	+ 0.1	+ 0.1	保 合	保 合	保 合	保 合	保 合	保 合			
機 械 器 具	22.1	+ 0.3	- 0.3	保 合	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	保 合	保 合	- 0.1	保 合			
石 油 ・ 石 炭	5.6	- 4.1	- 0.6	- 0.1	- 0.3	- 0.3	保 合	- 0.2	- 0.2	保 合	-0.1			
木 材 ・ 同 製 品	6.2	- 1.2	+ 5.5	- 0.2	+ 1.5	+ 0.6	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.2	保 合	-0.1			
窯 業 製 品	3.0	+ 0.8	+ 1.3	+ 0.4	+ 0.1	+ 0.3	+ 0.1	保 合	+ 0.2	保 合	+0.2			
化 学 品	7.6	- 1.6	- 0.6	- 0.2	- 0.2	保 合	保 合	保 合	保 合	+ 0.2	+0.1			
紙 ・ パ ル プ	3.4	- 0.6	+ 0.4	保 合	+ 0.2	- 0.3	- 0.2	保 合	- 0.1	- 0.1	+0.1			
雑 品 目	7.9	同水準	+ 1.6	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.2	保 合	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.6	保 合			
工 業 製 品	82.0	- 0.5	+ 0.8	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	- 0.1	+ 0.1	+ 0.1	保 合			
うち 大 企 業	59.6	- 0.5	同水準	+ 0.1	保 合	- 0.1								
中 小 企 業	21.0	- 0.1	+ 2.3	+ 0.1	+ 0.4	+ 0.4								
非 工 業 製 品	18.0	- 2.4	+ 2.1	- 0.5	- 0.2	+ 0.1	保 合	- 0.3	+ 0.6	+ 0.3	+0.3			

(注) 本行調べ。

工業製品生産者物価の推移

(単位・%)

	ウ エ イ ト	前年 比上 昇率 43年 平均	最近の推移			
			43年		44年	
			11月	12月	1月	2月
総平均	100.0	+0.2	保合	+0.1	+0.1	保合
食料品	12.6	+4.3	+0.1	+0.3	-0.1	+0.2
天然および化学繊維	3.0	-0.5	-1.1	-0.2	-0.1	-1.9
合成繊維	1.4	-6.0	-0.7	-0.1	-0.5	-0.2
繊維物	2.8	+0.7	+0.5	-0.2	-0.2	-0.4
繊維二次製品	3.2	+6.2	-0.1	-0.4	+0.6	+0.2
普通鋼鋼材	7.2	-8.9	-0.2	-0.3	-0.9	-0.3
特殊鋼鋼材その他	2.5	-1.7	保合	保合	-0.5	+0.2
非鉄金属	4.4	+1.8	-1.4	+3.2	+1.7	+1.4
金属製品	4.6	+0.4	+0.2	保合	保合	保合
一般機械	10.4	+2.5	-0.1	保合	+0.4	+0.2
輸送機械	8.3	-1.7	-0.1	保合	-0.1	保合
電気機械器具	9.1	-1.1	-0.1	保合	-0.1	保合
石油・石炭製品	3.7	+0.3	+0.2	+0.1	-0.7	-0.6
木材・同製品	5.0	+6.1	+0.7	-0.3	+1.4	+0.5
窯業製品	3.4	+0.9	+0.2	+0.3	保合	-0.2
化学品	7.8	-2.8	-0.2	-0.2	-0.2	-0.2
紙・パルプ・同製品	4.5	-0.1	+0.1	-0.3	+0.1	-0.4
雑品目	6.1	同水準	+0.4	+0.1	+0.1	+0.1

(注) 本行調べ。

消費者・輸出入物価の推移

(単位・%)

		ウ エ イ ト	前年度比 上 昇 率		最近の推移			最 近 の 年 月 前 同 比	
			42 年 度 平 均	43 年 度 平 均	44 年				
			1 月	2 月	3 月				
消 費 者 物 価	東 京	総 合	100.0	+4.1	+5.2	+0.6	+0.3	+1.0	+ 4.3
		(季節商品を除く)	91.4	+3.9	+5.6	-0.1	-0.2	+0.1	+ 4.8
		食 料	40.9	+5.7	+6.5	+1.6	+0.9	+2.4	+ 4.4
		住 居	10.7	+3.7	+2.4	-0.5	+0.3	-0.5	+ 1.7
		光 熱	4.5	+0.1	+0.3	保 合	-0.1	-0.1	- 0.3
		被 服	13.0	+3.0	+5.5	-0.2	-0.9	+0.7	+ 6.1
		雑 費	31.0	+3.4	+5.3	-0.2	-0.1	+0.2	+ 5.1
	全 国	総 合	100.0	+4.2	*+4.9	+0.3	保 合		+ 3.0
		(季節商品を除く)	91.4	+3.9	*+5.4	-0.2	-0.1		+ 4.8
	上 の 都 市	総 合	100.0	+4.1	*+5.0	+0.4	保 合		+ 3.0
(季節商品を除く)		91.3	+3.9	*+5.4	-0.1	-0.2		+ 4.8	
輸 入 物 価	輸 出		+0.2	*+0.6	+0.2	+0.3		+ 0.8	
	輸 入		-0.4	*-0.2	+0.6	+0.2		- 1.4	
	交易条件		+0.7	*+0.8	-0.4	+0.1		+ 2.3	

(注) 消費者物価は総理府統計局、輸出入物価は本行調べ。

\*印は43年4月～44年2月平均。

したが、住居費、光熱費等は下落した。なおこの結果、43年度平均では、前年度比 +5.2% の上昇となった(前年度同 +4.1%)。

(2月の交易条件——久方ぶりに好転)

2月の輸出物価は、前月比 +0.3% 上昇。品目別では、金属・同製品(銅製品、厚板)、雑品目(合板)、繊維品(衣服、スフ織物)、機械器具(カメラ、クリスマス電球)等が上昇したが、食料品(冷凍めかじき)は反落。輸入物価も前月比 +0.2% 上昇。品目別では、繊維品(原綿)は下落したが、雑品目(天然ゴム、木材)、鉱物性燃料(原油)、金属(銅地金)等は上昇。この結果、交易条件指数は、99.6と前月比 +0.1% ポイント上昇し、4 か月ぶりに好転した。

◇国際収支は大幅黒字基調を持続

2月の国際収支は、前月季節的な事情から赤字となった貿易収支が再び黒字に転じたことに加え、長期資本収支も前月をさらに上回る黒字となったため、総合で186百万ドルの黒字と前月(98百万ドルの赤字)比大幅な改善をみた。貿易収支を季節調整後でみると、輸入が前月を下回ったものの輸出が伸び悩んだため黒字幅は 276 百万ドルと既往最高の前月より縮小したが、なお相当な高水準を続けている(43年7～9月平均206、10～12月平均263、44年1月322各百万ドル)。長期資本収支は、対日証券投資が既往最高の流入超を記録し、また民間インパクト・ローンの取入れも企業のおう盛な資金需要を映じて高水準に推移するなど、外資の流入が好調であった反面、本邦資本の流出は船舶輸出の減少もあって比較的小幅にとどまったため、結局53百万ドルの黒字となり、受超幅は前月(受超43百万ドル)よりさらに拡大した。

金融勘定では、外貨準備が 151 百万ドルの増加となり、為替銀行の対外ポジションも買持輸出手形の増加を主因に44百万ドルの改善をみた。なおこの結果、2月末の外貨準備高は 3,086 百万ドルとはじめて30億ドル台に乗せた。

2月の輸出は、前年同月に比べ 21.5% 増となったが、伸び率はここ数か月の水準(43年10～12月

+32.1%、44年1月+29.6%)を下回り、季節調整後でも前月比-4.8%の減少となった。これには船舶輸出が大型タンカー引渡し遅延から低調であったほか、米国向けが前月著増のあと伸び悩ん

## 国 際 収 支

(単位・百万ドル)

	43 年			43年 44 年			前年 同月
	4~ 6月	7~ 9月	10~ 12月	12月	1月	2月	
経常収支	191	504	649	305△	175	107	△ 47
貿易収支	546	845	1,022	452△	45	227	80
輸出	3,112	3,327	3,746	1,408	836	1,080	889
輸入	2,566	2,482	2,724	956	881	853	809
貿易外収支	△ 310	△ 317	△ 325	△ 122	△ 124	△ 114	△ 119
移転収支	△ 45	△ 24	△ 48	△ 25	△ 6	△ 6	△ 8
長期資本収支	△ 19	7	△ 123	△ 108	43	53	9
基礎的収支	172 (302)	511 (285)	526 (293)	197 (2)	132 (235)	160 (209)	△ 38 (△ 29)
短期資本収支	△ 20	31	76	14	△ 11	△ 12	78
誤差脱漏	69△	1△	15	△ 50	45	38	29
総合収支	221	541	587	161△	98	186	69
金融勘定 外貨準備 増減 その他	221 13 208	541 384 157	587 531 56	161△ 113 48△	98 44 142	186 151 35	69 26 43
外貨準備高	1,976	2,360	2,891	2,891	2,935	3,086	1,998
為銀対外 ポジション	△ 1,022	△ 857	△ 789	△ 789	△ 934	△ 890	—

- (注) 1. カッコ内は貿易収支のみを季節調整した基礎的収支。  
2. 短期資本収支には金融勘定に属するものを含まない。  
3. 金融勘定の△印は純資産の減少。

## 輸 出 入 指 標 の 推 移

(季節調整済み、単位・百万ドル)

	国際収支			通 関		輸出 信用 状	輸出 認証	輸入 承認
	輸出	輸入	貿易 じり	輸出	輸入			
43年								
1~3月	945	815	130	959	1,028	783	1,009	903
4~6月	1,045	820	225	1,064	1,041	846	1,122	945
7~9月	1,074	868	206	1,098	1,107	881	1,162	997
10~12月	1,158	895	263	1,174	1,142	956	1,234	1,047
43年10月	1,114	871	243	1,134	1,119	938	1,226	1,012
11月	1,192	902	290	1,201	1,148	956	1,214	1,054
12月	1,167	910	257	1,188	1,158	974	1,263	1,075
44年1月	1,228	906	322	1,242	1,154	1,039	1,215	1,112
2月	1,169	893	276	1,194	1,123	1,070	1,201	999

(注) 1. 季節調整は、センサス局法による。

2. 四半期計数は、月平均額。

だことが響いている。商品別の動き(通関ベース)を前年同月比でみると、自動車、ラジオ、合繊織物などはこれまで同様高い伸びを示しており、鉄鋼も米国向けの不振にもかかわらずE E C、東南アジア向けなどが好伸したため前年を3割以上上回ったが、他方、船舶が低水準にとどまったほか、食料品(魚介類)も前年が高水準であった関係から前年比マイナスとなった。また仕向け先別には、東南アジア、中近東、南米向けはいずれも好

## 通 関 輸 出 の 内 訳

(単位・百万ドル)

	43 年			43年 44 年		
	4~6月	7~9月	10~ 12月	12月	1月	2月
食料品	89 (+16)	111 (+7)	128 (+19)	37 (-3)	31 (+11)	29 (-34)
魚介類	52 (+9)	73 (+4)	85 (+22)	25 (-7)	17 (-10)	18 (-46)
繊維製品	485 (+12)	513 (+21)	613 (+27)	248 (+27)	116 (+52)	168 (+22)
綿織物	59 (-8)	59 (+1)	73 (+6)	31 (+15)	12 (+39)	19 (+9)
合繊織物	91 (+21)	103 (+44)	131 (+30)	53 (+34)	21 (+57)	35 (+31)
化学製品	207 (+15)	220 (+23)	231 (+33)	81 (+32)	56 (+51)	66 (+28)
非金属 鉱物製品	82 (+9)	82 (+11)	95 (+22)	35 (+17)	21 (+20)	28 (+12)
金属製品	586 (+37)	615 (+34)	663 (+33)	232 (+22)	150 (+17)	206 (+27)
鉄 鋼	427 (+40)	455 (+38)	480 (+37)	162 (+22)	110 (+12)	154 (+34)
機械機器 (船舶を除く)	1,361 (+30)	1,462 (+27)	1,673 (+36)	643 (+42)	392 (+26)	486 (+27)
船舶	1,107 (+32)	1,184 (+35)	1,402 (+46)	538 (+44)	318 (+48)	423 (+38)
テレビ	57 (+77)	84 (+76)	86 (+87)	27 (+113)	16 (+71)	22 (+48)
ラジオ	98 (+24)	120 (+29)	131 (+35)	46 (+43)	27 (+57)	36 (+39)
自動車	179 (+52)	185 (+98)	213 (+65)	85 (+56)	52 (+53)	75 (+57)
船舶	254 (+22)	278 (+2)	271 (+2)	105 (+35)	74 (-23)	63 (-16)
光学機器	91 (+16)	98 (+20)	109 (+28)	40 (+31)	23 (+32)	31 (+25)
その他	360 (+16)	387 (+14)	406 (+26)	153 (+21)	93 (+47)	115 (+17)
合 計	3,168 (+24)	3,387 (+24)	3,807 (+32)	1,430 (+31)	859 (+30)	1,100 (+22)

(注) カッコ内は前年同月(月)比増減率(%)。

調を続けたが、西欧向けが船舶、食料品の減少から前年を下回り、米国向けの伸び率も鉄鋼の不振などからやや低めとなった。

先行指標である輸出信用状受額は、前年同月比+32.4%、季節調整後の前月比でも+2.9%と高水準を続けている。また、商社の輸出成約状況もこれまで同様高い伸びを示していることからみて、輸出は、先行き伸び率はいくぶん鈍化すると

### 通 関 輸 入 の 内 訳

(単位・百万ドル)

	43 年			43年 44 年		
	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月
食 料 品	485 (+ 0)	445 (+ 8)	487 (+ 7)	167 (+ 6)	162 (+ 16)	167 (+ 4)
小 麦	68 (- 26)	74 (- 7)	73 (+ 1)	27 (+ 25)	19 (- 15)	25 (- 6)
とうもろこし	67 (+ 23)	54 (+ 8)	63 (+ 9)	21 (+ 3)	22 (+ 25)	20 (+ 17)
砂 糖	44 (+ 40)	26 (- 1)	32 (+ 12)	12 (+ 22)	16 (+ 48)	17 (+ 11)
原 燃 料	1,921 (+ 13)	1,864 (+ 13)	1,964 (+ 9)	671 (+ 8)	656 (+ 13)	606 (+ 3)
羊 毛	96 (- 4)	92 (+ 2)	93 (+ 19)	38 (+ 30)	33 (+ 30)	31 (+ 19)
綿 花	154 (+ 12)	114 (+ 25)	116 (+ 32)	33 (+ 3)	34 (+ 14)	39 (- 11)
鉄 鉱 石	218 (+ 15)	210 (+ 16)	219 (+ 22)	73 (+ 11)	73 (+ 18)	67 (+ 15)
鉄鋼くず	34 (- 61)	32 (- 67)	54 (- 25)	21 (+ 29)	19 (+ 43)	8 (- 43)
大 豆	68 (+ 11)	66 (+ 9)	70 (- 3)	24 (- 15)	28 (+ 31)	22 (- 19)
木 材	315 (+ 37)	300 (+ 19)	297 (+ 16)	96 (+ 7)	87 (+ 13)	86 (+ 1)
石 炭	126 (+ 23)	135 (+ 38)	135 (+ 25)	46 (+ 20)	42 (+ 14)	54 (+ 35)
原 油	410 (+ 19)	404 (+ 22)	454 (+ 3)	157 (+ 6)	154 (+ 10)	143 (+ 5)
化学製品	157 (+ 4)	174 (+ 13)	192 (+ 16)	60 (+ 5)	66 (+ 22)	57 (+ 5)
機械機器	339 (+ 22)	307 (+ 25)	350 (+ 23)	121 (+ 9)	95 (- 8)	130 (+ 16)
鉄 鋼	51 (- 48)	56 (- 39)	75 (- 30)	26 (- 23)	17 (- 25)	27 (+ 10)
非鉄金属	152 (+ 3)	145 (+ 0)	190 (+ 13)	70 (+ 25)	68 (+ 14)	68 (+ 37)
そ の 他	149 (+ 25)	178 (+ 30)	187 (+ 30)	68 (+ 32)	57 (+ 25)	56 (+ 12)
合 計	3,254 (+ 9)	3,169 (+ 12)	3,445 (+ 10)	1,183 (+ 9)	1,122 (+ 11)	1,111 (+ 7)

(注) カッコ内は前年同期(月)比増減率(%)。

しても当面順調な推移を続けるものと思われる。

一方、2月の輸入は前年同月比で+5.4%、季節調整後の前月比では-1.4%と落ち着いた動きを示したが、これには米国港湾ストライキがかなり響いているものと思われる。商品別(通関ベース)にみると、鉄鉱石、石炭、羊毛等が比較的高水準を続けているほか、天然ゴムも値上がりからかなりの増加となったが、大豆、こうりゃんは米国の港湾ストの影響から前年を下回り、木材、綿花も低水準に推移した。なお、機械輸入が当月は高い伸びを示したが、これは航空機の入着があったためである。

輸入承認は前年同月比で-5.0%、季節調整後の前月比で-10.2%となった。このような落ち着きには米国の港湾ストも影響している模様で、品目別にみても大豆、とうもろこし、機械等の減少が目だつ。

1月末の輸入素原材料在庫は季節調整後の前月比で+3.7%となり、6ヵ月連続して上昇をみた。この結果、同在庫率は106.1と前年同月を12.6%上回る高水準となった。

### ◇新規学卒者の求人倍率は一段と高まる

今春の新規卒業者(中学、高校)に対する求人動向(1月末現在、労働者調べ)をみると、中学卒業者に対する求人数は、卒業者の絶対数の減少、進学率の向上などによる求職者減少見越しから前年同期を下回ったが、高校卒業者に対する求人は、前年同期に比べて+21%の増加となった。この結果、中学、高校合計では、前年同期比+15%の増加となった。この間求職数は全体で前年同期比-8%と減少したため、求人倍率は5.5倍と、前年同期(4.4倍)を大幅に上回った。

新規学卒者を除く一般労働力需給をみると、新規求人は、10~12月で季節調整後前期比+5.1%とかなり増加した。もっとも、年明け後伸び率は増勢一服ぎみとなっているが、この間、新規求職が伸び悩んでいるため、繰越しを含む有効求職倍率(1月)は0.8倍と低下傾向を改めていない。

常用雇用(季節調整後、全産業)は、10~12月に



前期比 +1.2% 増加し、更年後も小幅増加を続けている。一方、一人当たり所定外労働時間は昨年春以降減少傾向にあり、1月の水準は、43年3月を -4% 下回っている。

一人当たり現金給与総額の動き(季節調整後)をみると、10~12月は前期比 +3.3% の増加となった。

#### 一般労働力需給(新規学卒者を除く)

	新規 求人	季調済 み前期 (月)比	新規 求職	季調済 み前期 (月)比	就職	季調済 み前期 (月)比	* 求職 倍率	季調済 み
42年 10~12月	8.6	-2.7	4.3	-0.5	0.8	-0.4	0.8 (1.1)	0.88
43年 1~3月	5.1	-4.4	6.6	-2.1	0.0	0.2	1.0 (1.3)	0.89
4~6月	0.0	0.5	1.2	4.2	0.9	-2.4	0.9 (1.0)	0.96
7~9月	-2.7	4.5	0.0	-2.6	1.5	4.3	0.9 (0.9)	0.89
10~12月	4.7	5.1	0.3	1.6	3.9	1.7	0.8 (0.8)	0.83
43年 10月	5.6	6.6	3.3	6.3	3.5	2.6	0.7 (0.8)	0.87
11月	3.7	3.2	0.0	-3.8	1.3	-5.0	0.7 (0.8)	0.82
12月	4.8	-0.6	-0.9	0.6	7.6	5.9	1.0 (1.1)	0.79
44年1月	2.4	-2.7	0.2	-4.6	6.7	1.2	1.0 (1.1)	0.78

- (注) 1. \*印を除き前年同期(月)比増減率(%), カッコ内は前年同期(月)。  
2. 「求職倍率」は新規求職者数に前月からの繰越し求職者数を加えた「有効求職」を、新規求人に前月からの繰越し求人を加えた「有効求人」で除して算出。  
3. 労働省調べ。

#### 常用雇用・労働時間指標

(全産業、前年同期(月)比増減率・%)

	常用 雇用	季調済 み前期 (月)比	総実労働時間	季調済 み前期 (月)比	所定外労働時間	季調済 み前期 (月)比
42年10~12月	3.6	0.8	-0.2	0.1	3.1	1.4
43年1~3月	3.5	0.7	-0.3	0.0	2.4	0.2
4~6月	3.1	0.6	0.1	0.4	-0.5	-1.5
7~9月	2.9	0.8	-0.4	-0.8	-0.5	-0.5
10~12月	3.2	1.2	-0.3	0.2	-2.6	-0.8
43年10月	3.1	0.4	-1.5	-1.2	-1.1	-0.2
11月	3.2	0.3	2.0	3.2	-2.6	-0.5
12月	3.4	0.5	-1.2	-2.9	-4.0	-0.9
44年1月	3.3	0.3	-2.4	-2.8	-1.1	1.1

(注) 労働省調べ。

た。これは、年末ボーナスがかなりの高額となったこと(労働省調べ、主要223労組、組合員平均前年比 +20.5%)が主因であるが、定期給与も増勢をたどっている。

なお、春季賃上げ要求状況(日経連、従業員500人以上の民間企業250社)をみると、3月央現在で要求提出済みの120社の平均要求額は、1人平均9,600円と前年同期を+15%程度上回っている。

労働生産性(製造工業)は、10~12月平均で、前年比 +14.2%と年度初来14%強程度の伸びを続けているが、賃金の上昇には及ばない点が注目される。

#### 労働生産性の推移

(前年同期(月)比増減率・%)

	労働生産性 総合	労働生産性 製造工業	労働投入量 製造工業	生産量 製造工業	(参考) 賃金 総合	賃金 製造工業
42年10~12月	15.4	15.6	2.9	19.5	13.5	14.7
43年1~3月	13.9	14.0	3.1	18.0	13.1	13.9
4~6月	14.8	14.8	2.6	18.7	14.4	16.0
7~9月	14.1	14.3	1.8	17.5	13.6	14.2
10~12月	13.9	14.2	1.9	17.6	15.0	17.7
43年8月	12.9	13.0	2.0	16.9	13.2	13.5
9月	13.5	13.7	1.6	16.4	11.9	13.0
10月	16.6	16.7	0.1	18.1	10.5	13.9
11月	12.9	13.1	3.5	18.5	13.4	14.4
12月	12.4	12.9	2.2	16.4	17.4	20.5

(注) 生産性本部調べ。

#### 賃金指標

(前年同期(月)比増減率・%)

	総額	季調済 み前期 (月)比	うち 定期分	季調済 み前期 (月)比	実質賃金 (全産業)
42年10~12月	13.5	3.0	12.2	2.8	7.5
43年1~3月	13.1	3.0	12.7	3.0	7.4
4~6月	14.4	4.5	13.2	3.7	8.4
7~9月	13.6	2.2	13.2	3.1	6.9
10~12月	15.0	3.3	12.6	2.2	10.2
43年8月	13.2	-1.5	13.2	0.6	7.0
9月	11.9	0.5	13.2	1.3	4.0
10月	10.5	-0.1	12.6	0.3	5.5
11月	13.4	3.0	12.9	1.0	7.8
12月	17.4	4.4	12.3	0.1	13.0
44年1月	11.6	-3.8	12.2	1.0	7.9

(注) 労働省調べ。